




## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3024 号	氏名	財前 友貴
審査担当者	主査 <span style="font-size: 1.5em;">ス下 亨</span> 副主査 <span style="font-size: 1.5em;">矢野 博久</span> 副主査 <span style="font-size: 1.5em;">田中 法瑞</span>	(印)  (印)  (印) 	
主論文題目： <b>Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy with Cisplatin versus Sorafenib for Intrahepatic Advanced Hepatocellular Carcinoma: A Propensity Score-Matched Analysis</b> (肝内に限局した進行肝細胞癌に対する肝動注化学療法（シスプラチン）と薬物療法（ソラフェニブ）の予後の比較）			

### 審査結果の要旨（意見）

肝細胞癌の診断や治療法、治療後のサーベイランスは、ある程度確立されたと思われるが、難治性の進行肝細胞癌の治療については、まだまだ議論の余地があると思われる。本研究はシスプラチンone shotによるHAICの治療成績と分子標的薬であるソラフェニブの治療成績を比較検討した論文である。Propensity score matchingを用いた比較検討では、HAIC群の方が有意に全生存期間の延長を認めた。また、ソラフェニブの適応はChild-Pugh class Aに限定されるため、Child-Pugh classで層別化し比較したところ、HAIC群の方が有意に全生存期間の延長を認めた。以上の結果から、肝細胞癌に対するシスプラチンone shotによるHAICの治療は、進行肝細胞癌に対する有効な治療方法であることが示された。審査にあたり、今後の展開や研究内容に対する質問にも著者よりの確な返答が得られた。よって、本論文は十分に学位に値するものと考えられた。

### 論文要旨

進行肝細胞癌に対するリザーバーを使用した肝動注化学療法(HAIC)はソラフェニブよりも予後の延長効果を認めるというエビデンスが得られていますが、シスプラチンone shotによるHAICの治療成績については示されていないため、久留米大学関連施設で集計したソラフェニブ治療群を対照としてシスプラチンone shotによるHAICの予後の比較を統計学的に評価しました。方法は2006年6月～2020年3月の期間に、肝内に限局した進行肝細胞癌に対して当院でシスプラチンone shotによるHAICを施行した88例と、関連20施設でソラフェニブによる薬物療法を行った243例を対象として、全生存期間を評価するためにKaplan-Meier曲線を用いてlog-rank検定を行いました。全体の比較では全生存期間において有意差を認めませんでした(MST:HAIC群 14.0ヶ月・ソラフェニブ群 12.3ヶ月、 $p=0.0721$ )、症例の属性や腫瘍因子の偏りを避けるためpropensity score matchingを用いて比較したところ(HAIC群83例・ソラフェニブ群83例)、HAIC群の方が有意に全生存期間の延長を認めました(MST:HAIC群 15.6ヶ月・ソラフェニブ群 11.0ヶ月、 $p=0.0157$ )。本来薬物療法の適応はChild-Pugh class Aに限定されるためChild-Pugh classで層別化し比較したところ、class AのみにおいてもHAIC群の方が有意に全生存期間の延長を認めました(MST:HAIC群 24.0ヶ月・ソラフェニブ群 15.0ヶ月、 $p=0.0145$ )。結論として、肝内に限局した進行肝細胞癌に対してシスプラチンone shotによる肝動注化学療法はソラフェニブよりも予後延長効果を認めることが示唆されました。